

Journal of Chubu University Education

No.17

2017

【実践研究・実践報告】

ハイブリッド・プロジェクト始動！

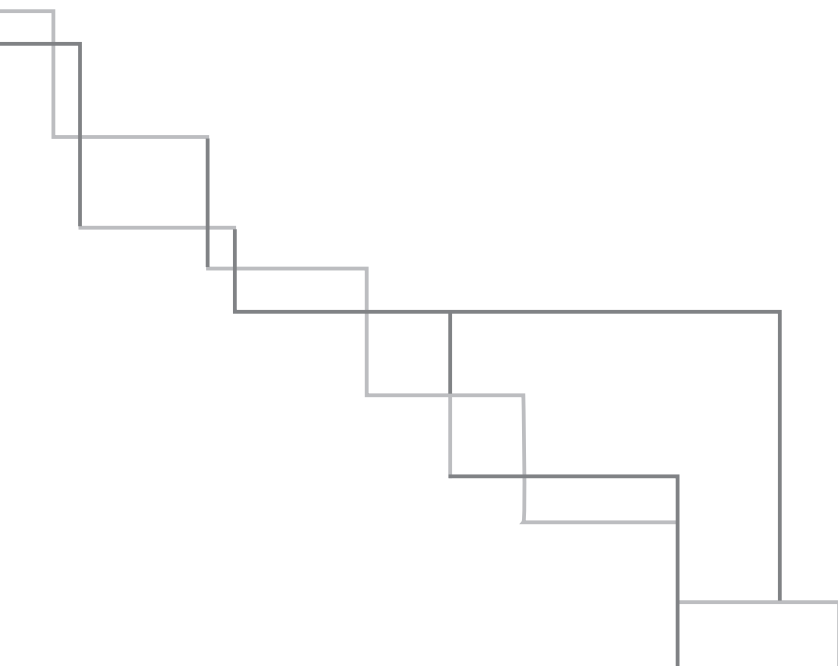
－国際関係学部の新たなる挑戦－ 中山紀子・伊藤正晃

【Practical Reports】

May the Hybrid Project Commence!:

New Challenges for the College of International Studies

..... NAKAYAMA Noriko and ITO Masaaki



ハイブリッド・プロジェクト始動！

－国際関係学部の新たなる挑戦－

中山 紀子^{*1}・伊藤 正晃^{*2}

要 旨

中部大学国際関係学部では、2016年度秋学期に「ハイブリッド・プロジェクトA」の授業が始まった。新しく生まれ変わった国際学科の新しい授業である。複数の教員が学生たちと車座になるため、通常の講義形式とは異なり、教壇がない。興味や疑問のある事柄を発表したい人が授業で発表し、残りの教員や学生がその事柄に対して議論をするという方法である。手探りで始めた授業であったが、結果的に参加した教員も学生も非常に満足した授業となった。

キーワード

ハイブリッド、プレゼンテーション、議論、即興性、国際学

1 はじめに

3学科体制であった国際関係学部を、2016年度より、3学科の垣根を取り払い、1学科体制による新たな国際関係学部をスタートさせた。それに伴い、新しいカリキュラムを組む必要に迫られることとなった。これまでの3学科でおこなわれていた科目を統合した新たな科目の設定を迫られ、さらに学生の要望に沿ったかたちのオーダーメイドに近い科目の開設のため、学部の所属教員が長きにわたり議論を重ねることとなった。

本稿は2016年度秋学期に開講された「ハイブリッド・プロジェクトA」（1単位、選択）について、概要と具体的な内容を伊藤正晃が、また、その成立の経緯を中山紀子が述べる。

2 「ハイブリッド」へのこだわり

「ハイブリッド」という言葉を科目名に入れることにこだわった。そもそも、ハイブリッド (hybrid) には「交配種、雑種、混血」といった訳が充てられているが、語源は古代ギリシア語の「暴力」を意味する *ὑβρις* (hubris) からきている。当時の「ハイブリッド」には「純血でない、不純の」といったマイナスイメージをもった語彙であったと推測できる。また、もし「ハイブリッド」という語彙がローマ帝国の支配下にあったギリシアで誕生したとすると、「暴力」を意味する「ハイブリッド」が雑種のような意味で用いられることは容易に推測ができる。しかし、現在では

「ハイブリッド」が好まれて使われる。しかも、「ハイブリッド」であるほうが、混じりけのないものよりも素晴らしいものであるとさえ感じるほどの勢いだ。国際関係学部では、学生と学生、教員と教員、学生と教員の混合により、昨今叫ばれているハイブリッド効果を狙うことに力を置くこととなった。

3学科が統合されたことで、各学科の教員間の壁も取り払われた。そこで、各学科が連携して、それぞれの特徴を活かした科目づくりに焦点が当たった。案として挙げたのが、学科の教員が複数人で担当する「ハイブリッド」形式の授業スタイルであった。1つの教室に同時に複数の教員が会する授業スタイルは斬新であるとともに、専門分野の異なる教員同士が、ある事柄に対して意見を交わすことで、学生に対して様々な角度からの捉え方が可能であるということを、授業の中で伝えていくことができ、また、学生からの多様な質問に対して、ピンポイントで教員の専門分野にヒットしなくても、複数の教員が補完しあうことで、学生を的確に指導することが可能となる。

このような考えから、国際関係学部は複数教員が同時に1つの授業を担当する「ハイブリッド」形式のスタイルを採用した。

3 「ハイブリッド・プロジェクト」の構築

「ハイブリッド・プロジェクト」を構想する際、いくつかの案が上がった。

*1 国際関係学部 国際学科 教授 *2 国際関係学部 国際学科 講師

- (1) 教員全員が研究分野を含めた自己紹介をおこない、学生が共鳴できる専門分野をもつ教員に就き、対外的に発表できるプロジェクトを組むもの。
- (2) 上記の案を教員2人以上で1組を作り、学生がその組に就く形式のもの。
- (3) あるテーマを設定し、教室全体で意見を交わし、学生自身がそのテーマに関連した事柄に対し調査をおこなうもの。

この中で、(1)の場合は一般にゼミと呼ばれるものであり、複数の教員が一堂に会する必要はない。そこで、(2)と(3)が議論されたが、(2)は学生の要望に応えられない可能性があるとの判断で、(3)の方法で進めることとなった。

4 「ハイブリッド・プロジェクトA」の実情

「ハイブリッド・プロジェクトA」の科目が開講されたのは2016年度秋学期である。教員も学生も初めての試みであり、大まかな予定は立てていたが、学生の要望に沿うためには、その予定はあまり意味を成さなかった。柔軟に対応できるようシラバスでは表1のようにあえて簡潔な内容説明にし、履修する学生の要望に柔軟に対応できるようにした。

表1 シラバスより

講時	内容
1	担当教員紹介、教員と学生による関心事項のすりあわせ
2	テーマの設定（さまざまな視点から）(1)
3	テーマの設定（さまざまな視点から）(2)
4	テーマの設定（さまざまな視点から）(3)
5	テーマの設定（さまざまな視点から）(4)
6	テーマの設定（さまざまな視点から）(5)
7	中間報告 (1)
8	中間報告 (2)
9	テーマの深化・発展（複数アプローチの活用）(1)
10	テーマの深化・発展（複数アプローチの活用）(2)
11	テーマの深化・発展（複数アプローチの活用）(3)
12	テーマの深化・発展（複数アプローチの活用）(4)
13	全体発表（学生・教員によるディスカッション）(1)
14	全体発表（学生・教員によるディスカッション）(2)
15	全体発表（学生・教員によるディスカッション）(3)

初回の「ハイブリッド・プロジェクトA」を履修した学生は10名であった。そして、担当する教員は6名、ハイブリッド・プロジェクトの発案者である中山も毎講義参加した。

2016年度秋学期におこなわれた「ハイブリッド・プロジェクトA」の講義内容を表2に示す。毎回、授業の最初に教員、学生の区別なく提起者を立て、提案者の気になっている話題や、調べたことなどを発言する。その発言に対して、学生や教員が自分の意見を述べる。そういった方法で毎回の授業が成り立っていった。

第1講の終わりに、伊藤から第2講で提起する話題

を予告した。予告をすることで、学生や他の教員はその話題に対して予習や意見を準備することができ、発表後の議論が活発になることを期待できると考えたからである。伊藤が提起した内容は「国歌」である。日本の国歌である「君が代」は暗いイメージがあるが、他の国歌と比較したことがあるのか、「君が代」は短調なのか、「君が代」よりテンポが遅く暗いイメージの国歌はないのかなど、学生が議論しやすいテーマを提供した。また、そこに教員が参加し、多角的に物事を捉える手法を学生に提供できればと考えた。そのため、答えのないテーマを提案することに力を置いた。

それが功を奏し、第2講では、伊藤の提起した内容から活発な議論がなされた。伊藤はメロディーラインや調、リズムといった方面から国歌を読み解いていったが、他の教員からは「近代国家」そのものの在り方に議論が及び、国旗、法、民族などに話が膨らんでいった。そのような中で、学生はそれぞれがもっている持論をしっかりと発言し、それに対して教員がコメントを述べていった。

表2 各講の実際の主な流れ

講時	日付	内容
1	9/21	自己紹介（教員、学生）
2	9/28	短調の国歌について（伊藤（筆者））
3	10/5	国歌について（教員 K、中山（筆者）による資料配布あり）
4	10/12	自由の衝突（学生 B）
5	10/19	選挙に行かない理由（学生 J）
6	10/26	自由の語源（教員 N）
7	11/9	左利きのための自由（学生 I）
8	11/16	新聞記事「難民＝犯罪者？」（教員 L）
9	11/23	アメリカの Walmart（学生 G）
10	11/30	日本の仏教（学生 E）
11	12/7	韓国大統領弾劾下野ソング（教員 O）、韓国の今を英文記事で読む（教員 L）
12	12/14	国技・オリンピック（学生 D）
13	12/21	音楽史から見る世界と日本（学生 C）
14	1/11	チャイナドレス（学生 H）、世界のお正月（学生 F）、除夜の鐘（学生 A）
15	1/18	総括
16	1/25	ハイブリッド・プロジェクト B に向けて

表3にもあるように、教員は提起者の発言を受け、自分の専門分野とどういった関わりがあるのかを考え、授業で発言することにより、多方面の分野に話が及ぶ。そして、学生は1つの物事が多方面と関わりがあることということを実感できていることが窺える。それは学生だけではなく、教員間でも窺える。その議論を受けて、自分はこんな発表をしたい、みんなに訊いてみたいといった内容を持つことができ、以降の授業で提起していくこととなる。「教員が先、学生が後」といった決まり事もなく、学生から率先して提起が起こった

ことは、履修した学生の積極性と教員の多方面にわたる知識の網羅があってこそだと感じた。

第2講での提起から、国家の格差が論じられ、差別、不自由といった内容から「自由」というキーワードが取り上げられ、以降の授業では、さまざまな「自由」が提起された。（表2を参照）

毎回の授業の最後には、話題に対して感じたこと、議論を重ねて得た知識や思ったことをレポートとして提出させた。その一例として、表4および表5を挙げる。

表4では、国歌の違いから、国歌と国家の結びつきが取り上げられている。国歌とは何か、国歌の意味とは、といった社会的な分野に及んでいることが窺える。国歌の違いを示すことで、その国歌の歴史的背景や国民性といった範囲に疑問を抱き、学生自らが調べて発言する動きが見受けられた。それは学生だけではなく、教員にもその動きがあり、第3講では第2講の内容を受けて、同じテーマで異なる国の現状が報告されることとなった。

「短調は暗いのか」「そもそも国歌はいるのか」といった議論に及んだ際は、当たり前と思っていた常識が、実は国際的には非常識であったり、日本独自の考えであったりするのだと思い知らされた授業となり、ものの見方や姿勢を改めさせられた。学生もショックを受けたことがレポートからも窺える。

表4でも多方面に議論が及んだことが窺えたが、第3講を終えて書かれたレポートでは、一定の方向性が生まれたことが窺える。それが表5であるが、国歌から国旗に話が移り、国民を束ねるツールとしての機能を議論することになり、「違い」を明確化することで生む団結力、結束力、差別化、衝突、排除といった社会的問題に議論が及んでいった。教員Lの「Significant Others（重要な他者）」という発言には、全員が共鳴した。他者の存在が己を知ることにつながり、己の存在は他者の中にあることを理解し、常識にとらわれず、物事を多角的に見ようという考えが、学生だけでなく教員にも芽生えていった。

表3 第1講時のレポートより（2016.9.21）

	第1講を受けた感想	次回以降の要望
学生A	初回からいろいろな立場から意見が出て楽しかった。アフリカの文化や経済について興味がわいた。	格差、南北問題、それに伴う教育援助ができるか追究したい。
学生B	国際協力は善か悪か。 食文化に興味をもっている学生が多い。	国歌について調べてみたい。
学生C	「95%以上が人為的」に驚いた。エコバック、マイ箸を購入するほうが環境に良くない。	映像やグラフを見たり、音楽を聴いたりしたい。
学生D	海洋法に興味があいた。	
学生E	環境の話を聞いて、高校時代を思い出した。	アメリカのテロ問題について聞きたい。
学生F	国際的な援助も、地域によって対応を変える必要がある。	国際的な援助の中に経済や法がどう関わるか知りたい。
学生G	学問には哲学が必要だ。自分の哲学を耕して、自分の哲学で考える。	血をイメージするような国歌がある。「君が代」の背景を知りたい。
学生H	砂漠に木を植えることが環境を変えてしまっている。 自己満足で終わっていないか。	オリンピックで国歌を耳にする。日本の国歌はなぜ重苦しいのか。
学生I	価値観、法律、地理学的など違う分野からの意見が聞けた。	エネルギー政策、貿易、移民政策、国連の支援などに興味あり。
学生J	地球温暖化について興味がわいた。 国際協力はビジネスになっている。	ビジネスと国際協力。そのメリットとデメリット。
教員K	地球温暖化に関して、緑化は地域の価値観に基づいたものでなければおかしい。 国際協力はお金に関わり、ビジネスになっている。	関心のある事柄を個人で調べ、内容を発表する。そしてディスカッションをおこなう。
教員L	他人が「そうだ」と思える共感性をもつには、フィールドワークが意味をもつだろう。 逸脱や笑いは構造の真になっていく運動性をもつ。	
教員M	N先生の「先晩気づいた」という研究上の間違いは何だったのか気になる。	学生に如何に話をさせるか。教員は極力控えねば。
教員N	学生の意識が高い。他の教員に対する理解も深まり楽しみだ。	自分の報告をどうするか、よく考えたい。
中山 (筆者)	歴史学の先生が「系統立って勉強していない」という発言に驚いた。だからこそ、独自の研究ができていくのかと思った。	ハイブリッド風議論が後半に始まった。発言できる学生が多く充実感があつた。
伊藤 (筆者)	ボランティアは偽善か。金の動きで世界が見える。 情報は操作されている。	国歌から見る文化（使用言語が複数である場合、歌詞の内容など）

表4 第2講時のレポートより (2016.9.28)

	気になった発言：内容：それを選んだ理由
学生 A	教員 M：「日本人は他国のワールドカップに行ったときにしか日本の国歌を歌わない」。日本人が自国を意識するのは、他国に行ったときに感じる。：私たちのような若い世代が自国を意識しない。タイでは自国を愛し、国王を敬う姿勢が日常から感じられた。日本人はなぜ欧米に興味を示したり憧れを抱いたりするのか疑問に思った。
学生 B	伊藤（筆者）・教員 N：国旗を祝日に掲げない家が多くなった。北朝鮮は国歌があっても歌わない。：国歌とはなんだろう。改めて国歌について考えたい。日本は改めて立たせたりするが、他国はどのように歌うのか調べたい。
学生 C	学生 I：日本はスポーツの試合などで客があまり国歌を歌わない。：日本はおとなしい人族だと思う。国民性が違うのであるならば、欧米などと同じようにする必要はない。日本の静かでおしとやかな感じも大切だと思う。
学生 D	学生 E：若者と国家について。：自分の言いたかったことと似ていて興味がわいた。
学生 E	伊藤（筆者）：日本の国歌は短調と思われているが、実は違う。：日本の国歌が暗いイメージだったので、短調だと思っていた。他の国歌を聞き、日本よりも暗い国歌があり驚いた。
学生 F	教員 M：日本は国歌、国旗に対して尊敬の義務はない。：今回取り上げた国歌の歌詞を見ると「祖国」というワードが多く見られ、自国に尊敬、自信を持たせるようなイメージがある。国歌にこめられた意味を、歴史の背景を考えながら調べてみたい。
学生 H	学生 C・学生 E：日本人らしい国歌である。若者に定着していない。：君が代は暗い・重い・遅いというイメージがある。しかし、国際大会で他国の国歌がマーチ風で明るい歌が流れている中で、君が代がクールに感じられる。Cさんの発言のように、謙虚で優しい日本人の国民性と重なっているように思う。国歌を歌わないという学校があると話題になったが、他国ではどうなっているのか。
学生 I	教員 O・教員 M：東アジアは急激な近代化で慌てて国歌について考えた。ヨーロッパ諸国はもともとイギリスで使われていたものの歌詞を変えただけのものだった。法律に国歌がリスペクトするものと記述すべき。：急に考え始められたもののや、他国の国歌に相当するようなものに対して、それぞれの国民がどの程度、その国歌をリスペクトしているのか知りたい。
学生 J	教員 L：アフリカには国家意識がそもそもない。：国歌や国旗、国花、国鳥などは象徴として出会って、世界中が集合するときに使うために必要なのだと理解した。
教員 K	伊藤（筆者）：短調だけど、メロディーラインにより意識高揚に結びつくことの面白さ。：音楽と社会の関わりへの議論につながり、発想が広がっていくと思う。
教員 L	短調と長調で、短調の方が「暗い」とするのは、そういう印象、感じを持つが、「？」をもつ。短調でも長調でも、集団統合を図ったり、高揚の手段はあり得る。これに関連して、山陽と山陰という名称も、自称か他称かを問う必要があるし、また「陰」地方のポジティブ性とプラス価値の析出が探られなくてはならない。それは、そこに住む人たちの「言い分」が募られていかねばならないだろう。
教員 M	教員 L：国旗、国歌自体、人工的である。Nation State として成立するためのひとつの小道具にすぎない。：その通り！
教員 N	伊藤（筆者）：短調の国歌が少ないというのは驚いたというより考えたことがなかった。：音楽を聴いて、楽譜を見るというのは実に新鮮だった。
教員 O	教員 M・教員 L：国旗を変える国がある。国家も国旗も近代の産物である。：国旗や国家などは絶対ではない。しかも新しいものであって、反応しない国民も多にいる。
中山（筆者）	教員 O：「はたらの光」のメロディーが韓国の国歌に使われていた。：近代化で慌てて作らざるを得なかったことがよく分かった。「国歌とは何か」をよく表している。
伊藤（筆者）	教員 L：近代国家は人間の営みの歴史の中で、最近作られたものであり、国歌は人工的に作られたもの。：人を歌で束ねるのに何の意味があるのだろうか。カラーギャングのような集団としての構成員の証しとして国歌が存在しているのか。海外の人に、その人の国の国歌を披露するとウケがいい。異国だから懐かしさを感じるのか。それとも、その国を知ってくれていることに感謝しているのか。

5 「ハイブリッド・プロジェクト」の成果

筆者の伊藤正晃は第二外国語の習得、とくに中国語を指導するにあたり、統語論、語彙論、音声学、音韻論といった言語学の分野に特化して研究してきたため、中国以外のことに無頓着であった。本授業を担当する以前に、国際関係学を高校生に説明する機会があった。当時は、語学をきっかけにして国際関係学を語っていたが、国際関係学の主たる「国家間の関係性」について多くを語るができなかった。しかし、本授業を担当し、分野の異なる教員の話聞く機会が増え、各教員の多くの経験談や知識が身近なものとなり、人類

学や政治学などの領域の知識が格段に増えたことで、国際関係学の説明に厚みを持たせることができ、また、中高生に興味を持たせる説法ができるようになった。

学生の自主性をなくしては成り立たない授業形式であるが、自主性のある学生が履修するとは限らない。自主性がまだ薄い学生に対して、授業を受けていく間に、自主性が芽生えれば、それこそ「ハイブリッド・プロジェクト」の成功なのだと考える。現段階における学生の自主性の芽生えとして、ハイブリッド・プロジェクトAを受講した学生は10名、ハイブリッド・プロジェクトB（2017年度春学期開講）を受講した学生は13名

表5 第3講時のレポートより（2016.10.5）

	気になった発言：内容：それを選んだ理由
学生 A	教員 L：「重要な他者」。：自分が認められるためには他者が必要であることを意識できれば、グローバルリーダーのように世界を均等に見ることができる。他者を嫌うという概念がなくなるような言葉だと思った。「自由、freedom」と言いつつ、黒人を排除しようとするアメリカの風潮が気になる。
学生 B	伊藤（筆者）、中山（筆者）：国旗や国歌をグッズにしている国では、国民は国旗や国歌が好きだとわかる。日本には日の丸弁当ぐらいしか思い浮かぶが、富士山や日本刀をデザインしたグッズはかなりの多いと感じる。アメリカやイギリスは親しみを込めた国歌を作り、日本は尊厳を重んじた国歌づくりをしたのではないか。
学生 C	教員 L：Significant Others：大学で地元を離れたが、そこで初めて自分の文化や方言などに気がついた。アメリカの国歌は3番から先を歌わないのは黒人のことを悪く書いているからなのか。オバマ大統領（当時）が変えようと提言することができるのか。
学生 D	教員 L：重要な他者。：他者がいることで、自分たちの集団意識、帰属意識が生まれる。
学生 E	教員 K：アメリカの同時多発テロのときに国歌が毎日歌われていた。：中学生のときにアメリカ同時多発テロを調べたことがあったが、毎日国歌を歌っていたことは知らなかった。その真意を知りたくなった。
学生 F	中山（筆者）：アメリカ国歌で1、2番は歌われるが、それ以降は歴史的背景があって使われない。：アメリカは国歌、国旗に対し尊重意識をもっているにも関わらず、マイナスイメージを含む部分を除外するところを見ると、国家の在り方がどうなのか気になった。
学生 G	教員 L：Significant Others：他者（異文化、異なった生活様式）の存在を知ることで自分を知る。世界での自分の帰属するところを知る。地球旗ができるのは月に人々が移住して、地球と対立したときだと思った。
学生 H	伊藤（筆者）：自分が日本の国旗を身につけていたら。：星条旗やユニオンジャックの服やグッズは身につける機会が多い。ただ、日の丸を身につけると…。戦争反対のデモを町中でやっている人たちが身につけているイメージがある。なぜか政治的なものに結びついてしまう。
学生 I	学生 D、伊藤（筆者）：旗、歌の固有性は相手がいるから。駐中国大使の車の国旗に対する報道が日本と中国で異なる。：祝日に国旗を掲げる理由と、nationalismが強くなる時はいつかということが疑問になった。
学生 J	全体：国旗や国歌は士気を高めるために作られたり、勝利の象徴としてのものだったが、多面的に使われるようになり、団結力が目に見えてわかるようなデメリットもあると知った。
教員 K	教員 L：Significant Others：国歌や国旗が1つの方向へと統合されるものであるが、相対化した見方ができるかどうか重要なことだ。
教員 L	教員 K：Lady GAGA もジミヘンも、国歌をどんなジャンルの、どんな姿勢で歌っても、まず許される。だから国家の統合歌になり得ているのであろう。そこに異質への許容があるからだ。国家という集団形態が、宗教でも地域社会でもなく、その集団性を維持する歌が多様な異質を容認していってこそ、国家はその機能を維持するだろう。
教員 M	学生 D：「地球旗」は作れないか。：地球旗を作るには対抗する相手がいる。宇宙人とか。
教員 N	教員 L：Significant Others、異質性を認めないとユニバーサルになり得ない。nation state にもこれが必要だろう。：nationalism を単なる「内」と「外」の問題として捉えず、もっと広く深い perspective から見る発想に感銘を受けた。
教員 O	教員 M、教員 K：古代ペルシャの金属製の旗印、戦争と旗の関連性。：旗は戦時の合図や人々を動かすツールである。
中山（筆者）	教員 L：他者がいて初めて自分がある。：また教員 L にこの授業を持っていかれた気分。授業が終わったあの方が、みんなの議論が面白い。リラックスが必要だ。
伊藤（筆者）	教員 L、教員 K：Significant Others。アメリカの国旗、国歌とイベントは切り離せないものではない。：他を知ることで己を知る。相手を拒絶するのではなく、違いを見出し、その違いがどこから来るのか理解する。アメリカ国歌には黒人差別の記述があり、起立しないスポーツ選手がいることに驚いた。

おり、延べ人数は23名であるが、そのうち、両方を受講した学生は7名となっており、積極的に授業に取り組む姿勢が窺える。また、ハイブリッド・プロジェクトを受講した学生のうち、8名は長期/短期の留学を経験している。語学力を伸ばす一方で、国際化が進む現代を日本からだけではなく、海外から捉えようと努力している学生もいる。

自分が何に関心を持っているのか、どうしてそのものに関心を寄せたのか、それがどのような状況になっているのか、問題点はどこにあるのかなど、話題提供や議論に必要な知識を構築する方法を、ハイブリッド・プロジェクトを受講して学んでいると確信している。

この成果については、ハイブリッド・プロジェクトを受講した学生の今後の成長を継続して見ていきたい。そして、教員間の交流が盛んになることで、学部全体が「ハイブリッド」になれるよう、さらに異分野交流を盛んにしていきたい。

6 メイキング・オブ・ハイブリッド・プロジェクト

上記では、「ハイブリッド・プロジェクト」（A：1年次秋学期、B：2年次春学期、C：2年次秋学期、D：3年次春学期）のAからDのうち、ABCの3つの担当者になっている伊藤正晃が、まずはハイブリッド・

プロジェクトAの概要と具体的な授業内容を述べた。ここからは、発案者の一人である中山紀子がハイブリッド・プロジェクト誕生の経緯を述べたい。いわば、ハイブリッド・プロジェクトの舞台裏ともいえるが、その産みの苦しみを描くことによって、特徴と重要性がよりよく理解されると思うからである。伊藤と描写が被る、あるいは着目点が異なることがあるが、ハイブリッド・プロジェクトを複眼的にみるということでは解いていただきたい。

最初のきっかけは、学生たちの発言だった。2014年1月に中部大学開学50周年・国際関係学部創設30周年記念事業の一環として、国際関係学部夢構想シンポジウム『『国際』という夢をつむぐ』が開催された。そのときに6人の学生が国際関係学部におけるそれぞれの学びについて素晴らしい発表をしてくれたが、個々の発表で終わり、相互にコメントしあう時間はなかった。夢構想委員であった私は、それを惜しんで、発表者の学生によびかけて別の日に座談会を開いた。その座談会で、どんな授業があったらもっとよかったかという質問をしてみた。そのとき聞いた学生の意見が、「オープンキャンパスのときのように、いろんな先生がいろんなテーマを話しているのがいい」とか「先生と先生がどのように議論するか見てみたい」というものだった。国際関係学部のオープンキャンパスでは、広めの場所にいくつかテーブルを置き、それぞれのテーブルで先生が高校生相手にその高校生の興味にあった話をしていた。国際文化学科では当時それを「オンデマンド・ミニ講義」と呼んでいた。学生の希望に合わせて講義を成り立たせるのは、中部大学の謳い文句である「ティーラメイト」教育にもあった。ただ、オープンキャンパスでは、おおむね一人の先生が話していたので、それを複数の先生にしてみることにした。

このアイデアをもって、今度は学部の教員に、自分の教えられるテーマ、興味のあるテーマ、学生に興味をもってほしいテーマなどを、○○先生と一緒に場合と一人で教える場合とに分けて考えてもらった。授業初日に学生の前で複数の教員が上述の自分の複数のテーマを書いた紙を学生に配布し、受講した学生がそれらをもとに、自分の興味にあった教員に質問したり、○○先生と○○先生の組み合わせで△△のテーマで話してほしいなどの希望を述べあうのだ。受講したすべての学生の希望を板書し、それらをもとに学生同士、あるいは指名された教員も含めて、次回にどのような組み合わせでどのようなテーマを話し合うかを議論して決める。いわば毎回毎回1週間前に「オンデマンド・ミニ講義」のテーマが決まる。学生にとっては自分たちの希望するテーマがその都度議論によって決まる即興性をもつものになる。学生たち自身が、授業内容を

決める「メイキング・オブ・授業」の監督であり、主役になるのである。

私の頭のなかにはずっとこのような、学生の言った「先生たちがあちこちのテーブルでいろんなテーマを話し合っている」というオープンキャンパス風のイメージがあったが、実際のハイブリッド・プロジェクトAでは受講生数が多くなかったこともあり、授業開始直前に、クラスの分割をやめ教員と学生がつねに一堂に会す形式に方向転換した。このようにひらめいたのは、国際関係学部国際学科の最新パンフレット「地球を丸ごと学びつくせ！」のハイブリッド・プロジェクトを紹介する写真を思い出したからである。写真では複数の教員と複数の学生が一つのテーマを楽しそうに話しあっていた。クラスを分割しなかったことは結果的に非常によかった。教員の数が多ければ多いほど、多様な意見が飛び交うことにつながった。

しかし、そもそもハイブリッド・プロジェクトのコンセプトは、担当教員たちにすぐに理解されたわけではなく、否定的な反応が多かった。そのなかの「複数の教員がいくつかに分かれて学生の発表にコメントすることで、ハイブリッド性は事足りるではないか」という意見に対して、私はそれはどこか違うと感じた。そうであれば、すでに卒業研究や演習などで行われている指導と大差ない。昨今流行りのアクティブラーニングは学生の主体性を標榜しているが、たんに学生の主体性に「任せる」だけでは、いい発表は決して出てこない。むしろ、学生に教えるべきは、議論することの面白さ、考えることの面白さであり、自分に知識があればもっと面白くなりそうだと実感させることだ。学生による発表はずっと後でいい。まずは、学生が自分のふと呟いた言葉が先生たちのいろんな反応を引き起こすことを目の当たりにすることである。教員はそれぞれ自分の専門分野に引き付けて、学生の何気ない言葉から話を広げ、伸ばし、料理していく。ときに教員同士で異なる見解をもち、火花が散ることもある。学生は、どうやら答えはひとつとは決まっていらないと気づいていく。ポイントは、教員自身がその議論を楽しむことである。自論を熱く語ることで学生に気を遣う必要はない。学生に見せるべきは、議論に熱くなっている教員の姿だからである。したがって、テーマはなんでもよい。知識の伝授ではなく、姿勢への共感こそがハイブリッド・プロジェクトの肝だからである。学部長の「新奇であればあるほどいい」という言葉にも助けられた。

別の否定的な意見は「教員だけが熱くなって、学生が白けてくるのでは」というものだった。これは私にもどうなるか読めなかった。しかし、このような授業を求めている学生は必ず存在すると信じていた。前述

したシンポジウムで発表した学生たちのように、通常の授業では物足りなさを感じている学生は一定数いるだろう。単位のためではなく、参加するだけでワクワクするような授業を、そのような学生たちのために開きたかった。受講した学生のワクワク感は他の学生にもきっと良い影響を与えるにちがいない。これについては、オリエンテーションのときに、ハイブリッド・プロジェクトの授業を「議論が多く、有益な授業だが負担が多い」と説明することによって、ある程度覚悟のできた学生を募ることにした。別の教員から、「1年次から2年次にかけて通常に行なわる予定の演習系ゼミ（スタートアップセミナー、国際基礎演習、国際応用演習A、国際応用演習B）と重ねてはどうか」という意見もあったが、これらの演習系ゼミは必修科目なので、同様の理由で、ハイブリッド・プロジェクトはむしろ自主的に選択できる状態にする必要があった。

ハイブリッド・プロジェクトの成否は、いかに教員が熱く議論を語れるか、いかに教員が学生を唸らせるコメントや質問を披露できるかどうかにかかっていた。学生の発表に教員がしたり顔でコメントするのに終始する授業にだけはしてはいけない。そのため、教員が安全地帯にいてはいけない。教員が当事者になる必要があった。私が考えたのは、授業最後に「今日は誰の発言にもっとも興味をもったか。その理由は何か」という感想レポートを取ることである。少し競争原理を導入してみたのだ。「今日の議論のなかで興味をもったことを書きなさい」という中立的な文言に変えてはという意見があったが反対した。この感想レポートは受講する学生だけでなく、参加した教員にも書いてもらい、翌週にすべての感想レポートをコピーして全員に配布し、先週の誰の意見がもっとも多くの参加者の興味を惹いたかが一目瞭然になった。教員であること

も、学生であることもあった。また、その感想レポートから議論が再燃した。同様の理由で、学期末に学生に課すレポートは、教員にも書いてもらった（これらのレポートは近々、国際関係学部HPに掲載する予定である）。議論において教員は学生に遠慮することはない代わりに、課題において学生と同じ義務を負う。その意味で、ハイブリッド・プロジェクトは学生も教員も立場は対等であるし、あるべきだ。対等であるので、先に生まれて研究をしている教員が多く発言することになるのは当然のようだが、発言する楽しさに触発されるのか、それとも意外に先生方もたいしたことと言わないと気づいて気楽になるのか、学生もどんどん発言するようになっていった。

7 おわりに

ハイブリッド・プロジェクトは、予想以上の成果をあげることができた。学生のみならず、教員も満足する授業となった。授業を始める前に不安を抱いていた教員も多かったが、杞憂に終わった。これが単なる幸運か、うれしい現実かは、今後のハイブリッド・プロジェクトの進展具合による。しかし、大きな可能性をもった授業であることは確かであろう。具体的にどういう可能性があるかは別稿に譲るが、複数の教員が担当する意味は大きい。資源（頭脳）の有効活用というシェアリングの精神が生きている。あたたかな知の共同体のなかにおいて「一人じゃない」と思える感覚は今こそ必要である。ハイブリッド・プロジェクトは国際関係学部ならではの特徴が生かされた授業である。さまざまな学問分野を背景にもつ教員が存在することによって可能になった授業である。これは、大きく言えば、現在、多様な価値観をもった人々と生きていく私たちにとって、ひとつの視座を与えるものとなるだろう。

May the Hybrid Project Commence! New Challenges for the College of International Studies

NAKAYAMA Noriko^{*1} and ITO Masaaki^{*2}

* 1 Professor, Department of International Studies, College of International Studies, Chubu University

* 2 Lecturer, Department of International Studies, College of International Studies, Chubu University

Abstract

The “Hybrid Project A” was started in the fall semester of 2016. This seminar was created in conjunction with the re-establishment of the International Studies Department. Unlike ordinary seminars, students and faculty members sit in a circle arrangement in this class. Therefore, there are no boundaries between the students and faculty members. Any participant who wants to express his/her opinions or raise questions and concerns is encouraged to present them. The participants then discuss the matters at hand. By working through the challenges and issues together, the students and faculty members who joined the seminar actively participated in discussions and achieved the objectives of the Hybrid Project seminar. Masaaki ITO presents the summary and content of the Hybrid Project, and Noriko NAKAYAMA presents the start-up process of the Hybrid Project.

Key words

hybridity, presentation, discussion, improvisation, international studies